

6 課

11月5日

彼は私たちのために 死なれた



安息日午後 10月29日

暗唱聖句

そして、モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。(ヨハネ3:14、15、新共同訳)

そして、ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」。(ヨハネ3:14、15、口語訳)

今週の聖句

黙示録13:8、マタイ17:22、23、マルコ9:30~32、ヨハネ19:1~30、ローマ6:23、1コリント1:18~24

今週のテーマ

死と税金からは逃れられないと言われてきました。しかし、そうとも限りません。死は避けられませんが、税金は逃れることができるからです。死は、数年先延ばしにすることはできても、遅かれ早かれ、必ずやって来ます。そして私たちは、義人であれ、悪人であれ、最後には同じ所に行き着くことを知っているのです。復活の希望が私たちにとってすべてなのです。パウロが言ったように、この希望がなければ、「キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまった」(1コリ15:18) ことになります。また、もし「キリストを信じて眠りについた人々」が、天国の神の御前でうろついているなら、それはかなりおかしなことになります。

キリストの復活は、私たちの信仰の中心です。なぜならば、キリストが復活したことにより、私たちの復活は保証されているからです。しかし、キリストは死からよみがえられる前に、もちろん死ななければなりません。そのために、ご自分の死を前にして、ゲツセマネの園で苦悩し、「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ」(ヨハ12:27) と祈られたのです。そして、その目的は死なれることでした。

今週は、キリストの死と、それが永遠の命の約束にどんな意味を持つかに焦点を当てて学びます。

問1 黙示録13:8、使徒言行録2:23、1ペトロ1:19、20を読んでください。キリストはどのように「天地創造の時から、屠られた」と考えられますか。

「地上に住む者で、天地創造の時から、屠られた小羊の命の書にその名が記されていない者たちは皆、この獣を拜むであらう」(黙13:8)。ここで重要なのは、キリストが「天地創造の時から、屠られた」ということです。この聖句は明らかに象徴的な意味で理解しなければなりません(黙示録は象徴で満ちています)。なぜなら、キリストが十字架につけられたのは、天地創造から数千年の後のことだからです。この聖句は、救いの計画は天地創造の前に立てられていたことを述べています。そしてその計画の中心は、十字架につかれる神の小羊であるイエスの死なのです。

問2 テトス1:2を読んでください。この聖句は、キリストの死を中心とする救いの計画が、どれほど昔に立てられたかを教えていますか。

「われわれをあがなう計画は、あとで考え出されたもの、すなわちアダムの墮落後に定められた計画ではなかった。……それは永遠の昔から神の統治の根本となってきた原則のあらわれであった」(『希望への光』676ページ、『各時代の希望』上巻5ページ)。

この計画は、エデンの園でアダムとエバに最初に明らかにされ(創3:15、21)、旧約時代はあらゆる血の犠牲に予表されていました。例えば、アブラハムの信仰が試されたとき、神はイサクの身代わりとして雄羊を備えられました(創22:11~13)。この身代わりは、キリストの十字架の贖いの犠牲をより明確に予表するものでした。

このように、救いの計画の中心は、何世紀にもわたって動物の犠牲によって象徴されたイエスの身代わりの死であり、その一つひとつの犠牲は、「世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハ1:29)であるイエスの十字架の死を指し示していました。

動物の犠牲は残酷で血なまぐさいものであることは事実です。しかし、なぜこのような痛まじさが重要なのかと言えば、キリストが私たちのために死んでくださったこと、そして、罪の代償が何であるかを、私たちに教えているからではないでしょうか。

問3 イエスの受難と死の予告に対する弟子たちの反応はどんなものでしたか。弟子たちの反応は、聖書を誤って理解する危険性について何を教えていますか。

マタイ 16 : 21~23

マタイ 17 : 22、23、マルコ 9 : 30~32、ルカ 9 : 44、45

ルカ 18 : 31~34

イエスは死ぬために生まれ、死ぬために生きました。その歩みは、カルバリーの十字架の上での大いなる贖いの犠牲へと一步一步近づくものでした。イエスは、その使命を十分に理解しておられ、誰にも、また、何ものも、そこから離すことはできませんでした。実際に、「彼の人生全体はその十字架の死の序章であった」(『キリスト教教育の基礎』382ページ、英文)。

地上での働きの最後の年に、イエスは弟子たちに、ご自身の間近にせまった死について、さらにははっきりとお語りになりました。しかし、彼らはその御言葉を現実のこととして受け入れようとしなかったようです。メシアの役割について誤った考えに満たされていた弟子たちが、最終的にイエスに望んだことは、メシアとして死ぬことでした。つまり、弟子たちの誤った神学が、彼ら自身に不必要な痛みと苦しみをもたらしたのです。

すでにニコデモに対して、イエスは次のように宣言しておられました。「そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである」(ヨハ3:14、15)。イエスはフィリポ・カイサリアで、弟子たちに、「御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている」(マタ16:21) こととお語りになりました。ひそかにガリラヤを通り抜け(マコ9:30~32)、エルサレムへの最後の旅の途中、イエスは再び弟子たちに、ご自身の死と復活についてお語りになります(ルカ18:31~34)。なぜなら、それが彼らが聞きたくないことであり、そのために、聞く耳を持たなかったからです。私たちが同じことをしてしまうのは、どれほど簡単なことでしょう。

人々、特に神の選民は、メシアの初臨について誤った考えを持っていました。今日、イエスの再臨についての誤った考えはあるでしょうか。

問4 ヨハネ19:1~30を読んでください。「すべてが終わった」(口語訳)というイエスの御言葉には、私たちにとってどんな重要なメッセージがありますか。

ついに、キリストにとって、人類にとって、また、全宇宙にとって決定的な瞬間が訪れました。深い苦悩の中で、主は闇の力と闘われました。ゲツセマネの園を、そして、不当な試練を通られ、カルバリ山へと続く道をゆっくりと歩まれました。悪天使たちは彼を打ち負かそうとしていました。イエスが十字架につけられている間、祭司長、律法学者、長老たちは彼をあざけりました。「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう」(マタ27:42)。

キリストは十字架から降りてご自身を救うことができたのでしょうか。はい、可能でした。しかし、そうはなさらなかったのです。ご自身をあざける者を含む全人類に対する無条件の愛は、彼らを見捨てることを許さなかったのです。実際、「そのあざける者たちのためにも、彼はその救いのために死のうとしていたのであった。彼は十字架を降りて自分を救うことはできなかった。なぜなら彼は、釘によってではなく、彼らを救いたいとの意思によって捕らえられていたからであった」(アルフレッド・ブラマー『マタイによる福音書の釈義的注解』397ページ、英文)。

苦難の中でキリストは、ここで、ユダの裏切りを含む十字架に至る出来事を扇動したのはサタンであったにもかかわらず、サタンの王国を打ち破っておられました(ヨハ6:70、同13:2、27)。「福音書記者が描こうとしなかった方法で、イエスの死は、サタンの行為と、サタンに対して勝利を勝ち取るイエスの行為の両方を描いたのであった」(ジョージ・E・ラッド『新約聖書の神学』192ページ、英文)。

『すべてが終わった』……(ヨハネ19:30)。戦いは勝利であった。イエスの右手とその聖なる腕が勝利をもたらしたのであった。征服者として、イエスは、その旗を永遠の高地にうちたてられた。天使たちの間に喜びがなかっただろうか。全天は救い主の勝利に凱歌をあげた。サタンは敗北し、彼の王国が失われたことを知った」(『希望への光』1077、1078ページ、『各時代の希望』下巻282ページ)。

この著しい対照を理解することは困難なことです。神の御子が激しく卑しめられることにより、私たちのために、そして宇宙のために、最も偉大で輝かしい勝利を取められたのです。

イエスがバプテスマを受けるためにヨルダン川においてになるとき、バプテスマのヨハネは次のように叫びました。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」(ヨハ1:29)。この言葉は、キリストが旧約時代のすべての犠牲が指し示していた神の小羊であることを認めるものでした。

動物の犠牲そのものは罪を取り除くことはできませんでした(ヘブ10:4)。それらは、将来、キリストの十字架の犠牲の効力による条件付きの赦ししか与えませんでした。「自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます」(1ヨハ1:9)。

問5 ヨハネ3:16、17を読んでください。自分の犯した過ちのために、非難されて当然だと感じるとき、私たちはこの聖句からどんな大きな希望を得ることができるでしょうか。

ヨハネ3:16、17は、宇宙を創造されたお方(ヨハ1:1~3)であるイエスが、私たち一人ひとりのためにご自身を罪の犠牲として捧げてくださったことを意味しています。それゆえに、私たちは、当然受けるべき非難を受けなくても良いのです。これは、福音の大きな約束です。

イエス・キリストは、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハ3:16)と宣言されました。しかし私たちは、キリストが私たちのためにご自身を自ら捧げられたこと(ヘブ9:14)を決して忘れてはなりません。ルターは十字架について次のように述べています。「彼〔キリスト〕の心に燃える無限の愛の炎によって焼き尽くされた祭壇は、熱烈なとりなしの祈り、激しい叫び、そして熱い嘆願の涙とともに天父にささげられた(ヘブ5:7)彼の生きた聖なるからだと血による犠牲を表していた」(『ルター著作集』第13巻319ページ、英文)。キリストは全人類のために、ただ一度(ヘブ10:10)、また、唯一のいけにえ(同10:12)として死なれました。なぜなら、その犠牲は、十分であり、その力を失うことは決してないからです。「たとえただ一人しかキリストの恵みの福音を受け入れなかったとしても、キリストはその一人を救うために苦勞、屈辱の生活と恥辱的な死をお選びになった」(『ミニストリー・オブ・ヒーリング』新装版83ページ)。

問6 1コリント1:18~24を読んでください。パウロは十字架について、何を語り、「世の知恵」とどのように対比していますか。なぜ今日も、「唯物論」〔実在のすべては物質であり、神も超自然の世界も存在しないとする考え〕が「世の知恵」を支配するとき、十字架のメッセージが非常に重要なのでしょうか。

キリストの十字架は救済の歴史のまさに中心です。「永遠もカルバリーの十字架において現された愛の深さを測ることはできない。そこにキリストの無限の愛とサタンのもてしない利己心が相対していた」(ステファン・N・ハスケル『十字架とその影』5ページ、英文)。

キリストがへりくだってご自身を人類の身代わりとして捧げられた一方、サタンは利己心のためにキリストを受難と苦悩に巻き込みました。キリストは、すべての人類が直面しなければならない自然の死を経験されたのではありません。彼は第二の死を経験されました。キリストを受け入れるすべての人が、第二の死を決して経験することがないように死んでくださったのです。

十字架の意味について考えるとき、私たちが覚えておかねばならないいくつかの重要な点があります。第一に、十字架は罪に対する神の正義の最高の啓示でした(ロマ3:21~26)。第二に、十字架は罪人のための神の愛の最高の啓示でした(同5:8)。第三に、十字架は罪の鎖を断ち切る偉大な力の源です(同6:22、23、1コリ1:17~24)。第四に、十字架は私たちの永遠の命の唯一の希望です(フィリ3:9~11、ヨハ3:14~16、1ヨハ5:11、12)。そして第五に、十字架は宇宙における将来の反逆に対する唯一の対抗手段です(黙7:13~17、同22:3)。

十字架についての決定的なこれらの真理のいずれも、「世の知恵」によっては見いだせないものです。それどころか、十字架の言葉は世の知恵には「愚かなもの」(1コリ1:18)であり、世の知恵はしばしば、創造主が存在するという、最も明らかな真理さえ認めないことが多いのです(ロマ1:18~20参照)。

ギリシア語の「愚かなもの」は英語の「ばか」に関連しており、十字架について説くことは、「世の知恵」によれば「ばかなこと」です。世の知恵は、イエスや、イエスが十字架の身代わりの死によって私たちに与えられる救いも知ることができません。

「世の知恵」が与える価値が何であれ、なぜ私たちは、イエスを信じることや、「宣教という愚かな手段」(1コリ1:21)を通して与えられる希望を決して妨げさせてはならないのでしょうか。

参考資料として、『各時代の希望』第74章「ゲッセマネ」、第78章「カルバリー」、『キリストへの道』「悔い改め」の章を読んでください。

「わたしは、全天がわたしたちの救いに関心を持っているのを見ました。そうであるのに、わたしたちは無関心でいてよいのでしょうか。自分が救われても滅びても、小さい問題であるかのように不注意であってよいのでしょうか。わたしたちのために払われた犠牲を軽視してよいのでしょうか。ある人々は実際にそうしています。彼らは提供された憐れみを粗末にしたために、神の不興を買っています。神のみ霊をいつまでも悲しませておくことはできません。今しばらく悲しませるならば、み霊は離れ去って行くのです。人間を救うために、神のなし得るすべてがなされて後、もし人が提供されたイエスの憐れみを軽視するならば、死が彼らの受ける分となり、それは非常に高い代価を支払ったこととなります。そして、それは恐ろしい死となるでしょう。なぜならば、彼らは救いを拒絶しましたが、キリストがその救いを買取るために十字架上で味わわれた苦悩を、彼ら自身が味わわなければならないからです。そのとき、彼らは、自分たちが失ったものが何であるか、すなわち、永遠の命と不滅の嗣業^{きぎょう}であることを悟るのです。人間を救うために払われた大きな犠牲が、それらの価値を示しています。かけがえのない魂が一旦失われると、それは永遠に失われることになるのです」(『教会への証』第1巻分冊①127、128ページ)。

話し合いのための質問

- ① ヘブライ 10:4 は、「雄牛や雄山羊の血は、罪を取り除くことができないからです」と言います。では、旧約時代の人々はどのようにして救われたのでしょうか。このことを、支払いはクレジットカードで済ませても、後で請求書が来た際に、支払わなければならないことにたとえることができるのでしょうか。
- ② 2 コリント 5:18～21 を読んでください。キリストが全世界の罪のために死なれたのなら、なぜすべての人が救われないのでしょうか。なぜ個人の選びが、十字架によって救われるか、その支払われた犠牲にもかかわらず滅びるかを決定するのに重要な役割を果すのでしょうか。
- ③ 「世の知恵」が教えるどんなものが、神にとっては「愚かなもの」なのでしょうか。世界のすばらしいもの、美しいものが、偶然の産物であるという考えはどうでしょうか。宇宙は全くの無から生じたとする考えはどうでしょうか。

もう一方の頬も向ける

中東の大学生であるオマール（仮名）は、是が非でも仕事が必要だったのですが、雇用されるための準備が何もできていませんでした。面接のとき、彼は会社の代表者に、「土曜日は聖なる日なので働くことができません」と堂々と言いました。すると会社の代表者は、まばたきもせず、「それでは、私たちはあなたを必要としません」と答えました。

それは真実でした。国の失業者はとて多く、その会社はオマールを必要としていなかったのです。多くの人が仕事を探していて、土曜日に喜んで働く人を見つけることは容易でした。

オマールは悲しそうに、その会社をあとにしました。彼は、数日前にキリストに人生をささげたばかりの新しい信徒でした。彼は決心をする前に、6年間信徒たちと交わり、聖書を研究していました。彼は不採用になったあと、手押しの屋台を買って、スイミットと呼ばれる胡麻で覆われた円形のパンを売ってお金を稼ごうと計画を立てました。

安息日を守っているオマールの友人たちは、彼の忠実さに心動かされ、彼のために祈り始めました。数日後、オマールは、あの会社から電話を受け、土曜日を休める仕事に就くことができたのです。そのことを友人たちに興奮しながら伝え、毎日少なくとも1人にキリストを伝えようと決心しました。

数日後、カフェで飲み物を飲みながら、年配の男性と宗教について話し始めました。オマールは、聖書を信じるに至った経緯と、自分が発見した驚くべき平安について語りました。

オマールがカフェを出るとき、近くのテーブルでその会話を聞いていた男性があとを追って来て、「あんなことを言うとは信じられない！ 恥ずかしくないのか。私たちの国で育ったのなら、よく知っているはずだ！」と叫び、拳でオマールを殴り始めました。

その日の遅く、友人がオマールにテレビ電話をかけてくると、彼は大きく腫れあがった目よりもさらに大きな喜びの笑顔で挨拶しました。「警察を呼んでもよかったのに！」と、友人は言いました。「そうだね。でも、イエス様が、もう一

方の頬も向けなさいとおっしゃったのを思い出したんだ」と、オマールは答えました。

「しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」（マタイ5章39節）。（リック・マックエドワード）

